

2026年7月5日

説教題『神は力なり！』第一コリント4:20、1:18 信仰って、なに？シリーズ④

主任牧師 加藤 誠

「神の国は言葉ではなく力にあるのですから。」(第一コリント4章20節)

「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」(第一コリント1章18節)

「神は力である！」。これはパウロの信仰告白です。第二コリント4章でパウロはこう語ります。「『闇から光が輝き出でよ』と命じられた神は、わたしたちの心のうちに輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。…そのような並外れて偉大な神の力のゆえに…四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打倒されても滅ぼされない」と。

闇で覆われていたパウロの心に、神が光を輝かせてキリストの栄光をさとらせてくださった。これはパウロ自身の体験です。かつてのパウロにとって十字架のイエスはみじめな敗北でした。「『わたしは神の子だ』などと偽り語るイエスを神は厳しく罰せられたのだ。あんな男の言葉に惑わされてはいけない」との確信において、パウロはキリスト者を徹底して迫害しました。けれども、そのパウロの心に神は光を輝かせて、十字架のイエスこそ神の独り子であると示された。イエスは私たちの罪を黙って引き受け十字架にはりつけにされた。十字架は惨めな敗北ではない。神の愛と救いの出来事なのだ。パウロは「並外れて偉大な神の力」によって心の闇を照らされ、福音の真理を知る者とされたのでした。

今朝の第一コリント1章でパウロはこう語ります。「十字架の言葉（福音）は、滅んでいく者には愚かなものだが、わたしたち救われる者には神の力だ」と。この世の知恵を頼みとする者には、十字架は愚かな敗北でしかない。理解できない。それゆえ、神は世の無学な者、無力な者を選ばれて、十字架の福音をお委ねになったと。この「神の力」は、私たちに一つのことを要求します。「黙りなさい、静まりなさい」と。「静まって、神がご自分の計画をご自分の方法で成し遂げられるのを見届けなさい」と。

バプテスマのヨハネの父親になったザカリアがそうでした。ザカリアは「正しい人」でしたが、彼の知恵では天使のお告げを理解しきれず反論しますと「お前は息子が誕生するまで口がきけなくなる」と叱られます。一見、不信仰に対する罰のように思えますが、「余計なことを言わずに、ただわたしがすることを見届けなさい」という神さまの配慮でしょう。そうしてザカリアは、年老いた妻に男の子が誕生するという神の御業を目の当たりにし、神を賛美する人に変えられたのでした。

また主イエスの父親になったヨセフもそうです。ヨセフも「正しい人」ゆえに、神さまがご自分の計画を受け止めきれませんでした。ヨセフは自分の判断で「マリアの夫の役を降りさせてもらおう」と決めますが、天使によって叱られ諭されます。「こ

それは神の御計画であり、聖霊の御業だ。マリアの傍らと一緒に歩みなさい」と。そしてヨセフもまた「神の救いの業を見届ける者」とさせられたのでした。「神の力」は、私たちは「黙ること、静まること」を求めます。神さまに言いたいこと、抗弁したいことを口にしてよいのです。が、最終的に神さまの御計画、神さまのやり方に従っていく。その信仰を私たちは求められているのです。

もう一つ、「神の力」が私たちに求めること。それは「からし種一粒の信仰」です。「からし種一粒の信仰」とは「小さくなること、貧しくなることへの勇気」です。けれども、私たちは小さく貧しくなることが怖い。力を失うことだから。やりたいことができなくなる、自由を失うことだから。それに対して「からし種一粒の信仰」とは「自分は小さくなり、神さまを大きくする信仰」です。からし種一粒には何の力もありません。からし種を育てて、大きな枝をはるものにする力はすべて、からし種の外から届けられるのです。自分の外から、すなわち神さまや人々から届けられる力を信頼する。これが「からし種一粒の信仰」です。「わたしの力ではなく、すべては神さまからいただく力です」という信仰。「わたしは限りなくゼロ。神さまが限りなく 100」という、とても大胆な信仰です。

主イエスは弟子たちを伝道に遣わすにあたって「杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、帯の中に金も入れるな!」と言われました。「少しでもお金はあるにこしたことはない」と思う私たちには、ものすごいチャレンジングな、厳しい言葉です。自分の不信仰を問われるわけですが、しかし、こういうエピソードもあります。マルコ福音書 9 章に、てんかんの息子を癒してほしいという父親が主イエスに「もしおできになるのなら、憐れんで助けてください」と言いますと主イエスから厳しく戒められる。「できればというのか。信じる者には何でもできる」。で、父親はあわてて言います。「信じます。信仰のないわたしをお助けください」と。「信仰のないわたし」が「信じる」とはどういうことでしょうか。一見すると矛盾した言葉です。けれども、わたしは思うのです。「そうか、わたしには神さまの恵みを 100%信じ切る信仰がない。でも、その信じ切れないわたしを助けてください」と祈ってよいのだと。「信じ切れないわたしを助けてください」とお願いしながら、神さまの恵みを知る者とさせていただく。それが「からし種一粒の信仰」なのかもしれません。

「神の力」について最後に覚えたいこと。それは、主イエスが教えてくださった「神の力」はヒーロー漫画の主人公が悪の力を次々に打ち負かしていくような、かっこいい力ではないということです。「十字架の言葉」、人々の目には格好悪く、惨めな敗北に見えたとしても、そこに隠されている「真実の愛の力」です。しかし、この神の「真実の愛の力」が私たちの現実を変え、人を新しく創り変え、憎しみや不信を変えていきます。パウロはその「神の力」の幸いを体験し、生涯その喜びを証しする者として生きました。不信仰な私たちが、この「神の真実の愛の力」に少しでも目を開かれ、心照らされて、信じる者とさせていただけるように祈っていきたいのです。